

学会の持続可能性を見据えて

「次世代」育成委員会委員長 走井洋一



本学会において次世代の育成が喫緊の課題と認識され、検討されたのは、特設委員会である

「次世代育成WG」においてであった。二〇二一年に同WGで集中的に議論が行われ、「次世代育成WG報告書」(以下、報告書)がまとめられた。報告書の内容は多岐にわたるため、ここでは詳細に踏み込まないが、同WGの課題意識は、①次世代の研究者・実践者の育成、②組織の持続可能性を高めるための人材育成、の二点に集約されるといってよい。

①については二〇二三年六月の理事会で「日本道徳教育学会次世代育成型研究プロジェクト内規」が承認された。同内規に基づく研究プロジェクト(PJ)が、報告書のフォローアップを担う「次世代」育成委員会の所管で進められ、同年九月より、「道徳科の指導方法」、「道徳科の評価」を研究課題として、おおむね一〜二カ月に一回程度の研究会を重ねてきた。第一〇四回大会ではその成果を報告するラウンドテーブルを実施したところである。

②については報告書の直後の理

事・評議員改選にあたって若手・女性の登用を促すことなどが行われた。

いくつかの点に限定されるものの、報告書に基づき、本学会はようやく次世代育成に着手することができたといえるのではないか。ただ、個人はそうした思いとともに、研究者育成についても少し別の思いももっていることをここで披瀝させていいただきたい。

詳細は割愛するが、国立大学において修士課程から教職大学院への転換政策が進められたものの、教職大学院は専門職大学院であり、高度な実践者の育成を目的としているため、修士論文が必須ではない。修士論文を書くことだけが研究者であることの証ではないが、それでもそうした訓練を受けていないことのデメリットは認めざるを得ない。

また、大学院生の構成のなかで社会人が占める割合が領域を問わず増してきた。教職大学院のターゲットの一つは現職教員にあるので、教育学においてもそのような動向が合致するとみてよい。

つまり、(教職)大学院に入学する現職教員が増え、そのうち、教育

について実践力を高めたいと思うものにとっては理想的な環境が整ったといえるのだが、研究したいと願うものにとっては、現行のシステムのもとで学びを重ねても、研究スキルが身に付きにくいという状況が生じたといえる。さらに道徳教育の研究者の裾野がそれほど広くないこと、研究よりも研修への志向が強いことなども相俟って、例えば『道徳と教育』に掲載される論文がなかなか増えないという事態が生じるようになってしまった。そのため、次世代の研究者を育成するという課題は、どの領域・学会においても生じているが、本学会にとってはより切実な問題となっているのである。

しかし、道徳教育を研究したいと思っただけでいる会員のみなさまにとって、現行システムのなかで支援を受けることが困難なのだと思えば、学会としてどのように支援していけばよいのかを考えることは必要だろうし、その取り組みの一つがPJであると考えることができないではないか。

とはいえ、これは個人の思いにすぎず、PJをどのように位置づけるのかは、それに参加される会員に委ねられるものであるべきである。会員のみならずにはPJをはじめ学会の諸資源を活用していただき、研究、実践を広げていただくことを切に願うところである。

(立教大学)

学会ノート

■ 学会ノート
昨年の元日に発生した能登半島地震から一年が過ぎました。昨年九月には豪雨による被害もあり、完全な復興はまだ遠い状況です。能登の一日も早い復興をお祈りします。

さて、昨年十二月、中教審に「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について」が諮問されました。いよいよ、学習指導要領の改訂に向けた動きが本格化します。本諮問には「道徳」という言葉は登場しません。しかし、「自らの人生を舵取りする力」や「持続可能な社会の創り手」を育てる」といった点は、道徳教育がその一端を担います。その育成に向けては、これまでの知見を生かし、「質の高い、深い学びを実現し、分かりやすく使いやすい学習指導要領の在り方」や、道徳教育・道徳科の目標・内容の在り方等についての検討が不可欠です。さらには、「多様な専門性を有する質の高い教職員集団の形成を加速するための方策について」が同日に諮問されたように、教師の質を維持・向上させるための採用・研修等についての検討も併せて求められています。本学会がもつ多様な視点を生かし、よりよい道徳教育の実現に向けた提言を行えるよう、ぜひ関連な議論を展開していきましょ

(浅部航太)

文部科学省における道徳教育の新しい動き

令和六年度小学校及び中学校各教科等教育課程研究協議会の小学校道徳部会を十一月十二日(火)、中学校道徳部会を同十三日(水)に開催しました。

これは、都道府県及び政令指定都市の道徳教育を担当する指導主事の方々に御参加いただき、小学校及び中学校学習指導要領の趣旨の実現を目指し、教育課程の編成及び実施上の諸問題に関する研究協議、情報交換等を行い、もって小学校及び中学校における教育課程の適切な実施を図ることを目的としたものです。ここ数年同様、今回も対面での参加とリモートでの参加を組み合わせた形式で実施しました。

小学校の部会では、午前中は「令和三年度道徳教育実施状況調査」の結果を踏まえ、道徳科における多様な指導方法の工夫について行政説明を行った後、研究協議として「道徳科における多様な指導方法の工夫について」と題し、道徳科の指導における課題を踏まえた道徳科の授業における指導事例について、一人一台端末の活用を含めて協議を行いました。

午後は、「道徳科における多様な指導方法の工夫及び研修、指導・助言の在り方について」と題して、初の試みとしてパネルディスカッションを行いました。第4期教育振興基本計画では、「国においては、更なる授業改善と指

導力の向上に資するよう、地方公共団体等との連携の下、優れた授業動画や教材等を集約したアーカイブの充実を図るとともに、高等学校を含めた各学校や地域等が抱える課題に応じた取組を推進する」と示しています。道徳科においては、引き続き教科化以降の実践的知見の見える化、共有化を図り、教師の指導力向上に資するようになる必要があります。そこで、パネラーの発表や提出資料、午前の協議等を踏まえながら、参加者全体で道徳科における多様な指導方法の工夫に関する教育委員会としての指導・助言等の在り方について協議を行いました。

中学校の部会では、午前中は「令和三年度道徳教育実施状況調査」の結果を踏まえ、諸計画の作成を通じた道徳教育の充実に向けた行政説明を行った後、生徒の資質・能力の育成を目指した各学校における道徳教育の諸計画に係る教育委員会としての指導・助言等の在り方について協議を行いました。

午後は、道徳教育の要としての道徳科の授業改善、指導力の維持・向上、そのための研修機会等の充実が喫緊の課題であることを踏まえ、道徳教育アーカイブの実践事例で紹介している授業動画を活用し、教師の指導力を高めるための指導・助言等の在り方や、研修の推進・充実に向けて協議しました。

小学校・中学校それぞれの部会で、熱心で活発な協議が行われました。

(教科調査官 井上結香子)

シリーズ・日本の道徳教育への提言 振り返って これからの道徳教育への願い 平野良明

私は昭和23(1948)年生まれである。30年代半ばの札幌での中学校生活においてもまだ非行は身近であった。

戦後からのそのような時代背景の中、昭和33年、週一時間の特設道徳が開始された。私にはその頃の道徳教育を取り巻く思いが今も鮮明である。

小学校5年生時に、担任K先生は時々「午後は自習」と言って退勤することがあった。帰宅して母に「今日も昼から自習になった」と話すと母は「道徳教育は怖いからね」と呟き、その日も自分たちが受けた「修身」のことや空襲体験を話してくれたながら「先生は道徳反対のデモに行ってるんだよ」と教えてくれた。

K先生との道徳授業

そんなK先生との道徳授業で忘れられない時間がある。昭和34年夏頃の授業だったのだが北海道新聞が黒板に貼られ、先生が読んで下さったのは32年2月末の「ソ連のオビ号による南極観測船宗谷救出」の記事だった。当時は米ソの厳しい冷戦下ではあったのだがソ連の原子力砕氷船オビ号が、氷に閉じ込められた宗谷を救出してくれたのである。K先生が読んでくださった記事を元に私たちは「世界が平和になるように」と願いを話し合った時間となって記憶から離れない。

K先生と道徳教育

今にして思えばK先生は「どのような道徳授業をして子ども達の道徳性を育め

ばよいか」と懸命に模索され、実践されていたのだろうと思える。オビ号が、イデオロギーを超えて、困難に直面していた宗谷と乗組員を救った記事を通して私たちに、今起きていることを通して「人間としての在り方や生き方の礎」を育てたいと願っていたに違いないと改めて気づかされている。

これからの道徳教育への思い

いじめも不登校も減らない現状が続いている。「共感力」「自己肯定感」「デジタル時代への適応」「自己省察と意思決定」等、これからの道徳教育が向き合うべきテーマや尽きない課題を考えていた時、私は「人生を変える教養」(岩竹美加子・青春出版)と出会った。フィナンダでは「宗教」を選択しない高校生のために「人生観の知識」という科目があり、その内容となっているのは「生徒が生きている世界とその現象」であることが書かれていた。私にはこの内容がこれからの道徳教育の一対象と重なり、中心教材となり得ると思えた。私はこれまで行われてきた道徳科におけるNIEと重なるこの考え方で、更に「児童・生徒が生きていく世界とその現象」を児童・生徒の実態に合わせて拾い上げ、教材化し、実践の中で道徳科の価値項目と重なる事例を積み上げてほしいと願っている。

65年前、その後熱心な道徳指導者となったK先生が目指した道徳教育と授業への思いは今なお生きて変わらないうと、改めて思っている。

(元札幌国際大学)

2024(令和6)年度秋季(第104回・静岡大学)大会報告

第一〇四回(二〇二四年度秋季)大会は、二〇二四年(令和六)年十一月二十三日(土)・二十四(日)の二日間、静岡大学(静岡キャンパス)を会場に、『現代的な課題』に向き合う道徳教育―『持続可能な社会の創り手』の育成を―目指して』をテーマとして開催されました。

これまで日本道徳教育学会は一九五八年(昭和三十二年)に第一回大会が開催され、全国各地で大会が開催されてきました。静岡大学および静岡県内での開催は今回が初となりました。大会準備にあたっては、永田会長をはじめ、貝塚事務局長、毛内企画運営委員長など多くの方にご助言を賜りました。深く感謝申し上げます。また、文部科学省、静岡県教育委員会、静岡市教育委員会、浜松市教育委員会、全国小学校道徳教育研究会、全国中学校道徳教育研究会、全国公民科・社会科教育研究会より後援をいただき、十三の出版社、企業、財団からは協賛のお力添えを賜りました。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

さて、本大会には全国から三〇七名の参加申し込みをいただきました。キャンパスのある静岡市は交通の利便性がよい場所にあるとはいえ、遠路よりご参加いただきましたこと、心より

感謝申し上げます。

開会行事・基調講演等

大会第一日目の開会行事では、永田会長および日詰学長からご挨拶をいただき、藤井より大会テーマの趣旨説明を行いました。その後、永田会長による基調講演が行われ、当日は、新幹線のダイヤの乱れにより、基調講演の開始までに会場に到着できなかった参加者の方々がいらっしやっただなかで、会場の三〇一教室は早々に満席となり、別教室でも同時中継が行われました。長年にわたり、さまざまな角度から新しい道徳の授業を提案されてきた永田先生のご講演は、参加者の皆様に深い感銘を与えました。



永田会長による基調講演

ラウンドテーブル・情報交換会

基調講演に続いて、会場を移動してラウンドテーブルが行われ、今大会を

きっかけに新たに会員になられた方々の企画も含めて全九つの部会が設けられ、それぞれの部会では熱心な議論が展開されました。ラウンドテーブルの後には、会場を移動して情報交換会が実施され、会の冒頭では静岡大学教育学部学部長の村山功教授より「学び方教育の現在」をテーマとした講演も行われました。



ラウンドテーブルの様子

自由研究発表・シンポジウム

大会第二日目の午前には、十四の分科会において、合計六十九件の自由研究発表が行われ、活発な意見交換がなされました。

大会第二日目の午後は、「いのち・防災と道徳教育―いかにして『持続可能な社会の創り手』を育成するか?―」をテーマとして、司会・指定討論者の林泰成会員(上越教育大学)による趣

旨説明・進行のもとで、藤井基貴会員(静岡大学)、大木聖子先生(慶應義塾大学)、森本晋也先生(岩手県立図書館)、高木優子先生(静岡県立駿河総合高校)の四名の報告者による報告がなされ、その後はフロアーからの質問も交えて質疑応答がなされました。シンポジウム終了後の閉会行事では、次回となる第一〇五回大会運営委員長の関根明伸会員(国士舘大学)のご挨拶、本学会副会長の西野真由美会員(国立教育政策研究所)による閉会のご挨拶があり、本大会を終えました。



シンポジウムの様子

最後に、学会理事会の先生方をはじめ、本大会の運営にあたり多大なるご支援ご協力をいただきました大会運営委員の先生方・学生スタッフの皆様、この場を借りて感謝と御礼を申し上げます。

(第一〇四回大会運営委員長 藤井基貴)

シリーズ・日本の道德教育への提言 教育の原点に立ち返る

鈴木由美子

グローバル化、情報化の急激な進展は社会構造を大きく変えようとしている。このような大規模な社会構造の变革は、一八世紀から一九世紀にかけての産業革命以来とも思える。私たちは未来を見ることはできないが、過去に学ぶことはできる。同時代に学校教育制度の発展に大きな影響を与えたペスタロッチー(一七四六―一八二七)の教育思想に今一度目を向けることは、今後の道德教育を見通す上で価値あることであろう。

ペスタロッチーは、スイスの教育実践家・思想家で、人間教育における道德教育の重要性を主張した。それは变革の時代にあつて、変わることなく大切なものを示そうとしたからである。ペスタロッチーは、道徳性は母親と子供との自然的関係から生じる原初的な感情だとし、愛、信頼、感謝、従順を育成することが道德教育の原点だとした。また、学校教育は家庭的な雰囲気であるときにのみ人類に対し貢献すると述べ、家庭的な雰囲気の大切さを指摘した。「生活が陶冶する」との言葉を残し、生活そのものが人間を教育すると指摘したことは周知のとおりである。これらから私たちが学ぶことは、第一に、心の中に自然に湧き上がる道德的感情を大切にすることである。困っ

ている人に親切にして喜ばれると嬉しい、正直に言うとすっきりするといった、人間の内奥に根差す感情を引き出していくことが大切である。第二に、学校に子供が自分の思いを安心して出せる温かな雰囲気があることである。お互いに許し合い、助け合う雰囲気があることで、心を開いて話し合うことができるのである。第三に、生活体験と結びついた道德的知見を培うことである。学校だけで道徳性が育成できるわけではない。家庭、地域と連携して行う学校行事や地域行事等での様々な体験を通して、いろいろな年齢の人と触れ合い、多様な考えを知ることが大切である。

情報化の進展の中で、私たちはどこか外部に答えを探しがちになってきている。しかし、道德教育は、人間の内奥に深く根差す感情を原点として、温かな人間関係の中でこそ行われるものだとするれば、もっと直接的な人間同士の触れ合いが見直されてもよいのではないだろうか。この観点からみたとときに、私たちは子供たちに温かな人間関係を提供しているだろうか。子供たちがお互いに成長を喜び合い、一人ひとりが尊ばれる学校生活を提供しているだろうか。今一度、教育の原点を見つめ直す必要があるように思う。

与えられる情報に一喜一憂するのではなく、目の前の子供をしっかりと見つめ、人間を人間にする教育の原点に立ち返ることを提言としたい。

(広島大学)

道德教育研究・実践の探訪

研究室編

金沢工業大学 白木 みどり

1 丸テーブルのある研究室

本学教職課程の私の研究室には、日々、様々な学生が顔を出す。オフィス・アワーは、「研究室の電灯がついている時」である。

特に、研究室が教職支援室に隣接していることもあり、アシスタントの学生を中心に、工業、建築、土木、情報、バイオ、化学、心理学を専門としながら、教職課程を履修する学生やその仲間が集う場となっている。所属学科や学年、性別を問わない空間は、学生達にとって、多様な価値観との出会いの場となっている。室内に設置した大きな丸テーブルを囲んで、自然に対話が始まり、時に議論にまで及ぶ。議論の内容は、専門科目、教授対策、あるときは、支援を要する学生の対応策、世界情勢から派生する正義論等、話題は、多岐に亘る。ここで繰り返しられる学生達の議論に、しばし仕事の手を休めて聞き入り、時には話題に飛び入りし、求められたときは、席を離れてじっくり向き合う。

それが、私の学生達との関わり方のスタイルだ。また、教職課程の心優しき学生は、とにかく、面倒見が良い。ドアの向こうを行ったり来たりして中を窺う学生がいれば、すぐに誰かが声を掛けて、質問や相談に乗っている。深刻な悩み以外の科目履修や学内行事、

課題に関する質問等には、私には及ばぬ情報量をもって積極的に対応している。実に、頼もしい学生達である。

2 能登半島地震支援活動

特に昨年は、大学の春季、夏季の休業期間を問わず、研究室が活気づいていた。

能登半島地震の発災後、教職課程の学生達によって、支援活動組織が結成されたのだ。私の研究室に集まって来る学生の有志から活動は始まった。

SNSで集まったボランティア、150名余りの学生が、登録した。しかし、被災地は、混乱の中、主要道路の復旧は、遅々として進まず、一般の現地入りにも厳しい制限が掛かっていた。

折しも、能登半島の先端、輪島市、珠洲市、能登町の中学生400名が、白山市、金沢市にそれぞれ集団避難してくるという情報が飛び込んだ。被害が大きかった地域の教育委員会は前例にない英断を下したのだった。早速、避難先施設の所長と連絡を取り、当面のニーズを聞いた。全国から送られてきたお菓子と文房具の支援物資で体育館は埋め尽くされているという。不足していたものは生鮮食品や飲料だった。JAの知人と連携を取った。JAは、生鮮品や飲料等の支援物資があるものの、支援に廻る人手に苦慮していた。令和6年2月2日夜、提供さ



れた「新鮮なオレンジ30個×40箱の避難施設への搬入」、それが学生達の支援活動のスタートだった。その後は、避難施設の消毒作業、浴場の清掃と中学生達が被災地に戻る前日までの2ヶ月間週3日のペースで通い続けた。また、雪が残る白山麓、片道33キロの道のりだった。

その間も併行して、JA提供の支援物資の搬出、運搬、搬入作業は半年以上に及んだ。二次避難者の為に、数百単位の飲料、レトルト食品、大人用紙おむつ、簡易トイレ等を、見なし仮設やNPO団体、高齢者施設に届けた。

8月、珠洲市教育長からの教育支援要請が飛び込んだ。受入人数17名、夏季休業時には、希望者を募り、半島最北端の被災地に入った。支援活動の内容やメンバーの派遣先(被災地の中学校4校が対象)被災地教員との打ち合わせ等、連日のようにミーティングが繰り返され、研究室の丸テーブルの夏の休暇は返上された。能登半島入り当日は、学会会員でもある九州支部木下氏が友人とともに応援に駆けつけて下さった。のと里山街道(自動車専用道路)のパーキングで落ち合った。涙が出るほど有り難かった。

3 尊き日々、道德的实践力から実践へ

特に、今回は、学生達の道德的实践意欲と態度が、長期に亘る支援活動という道德的实践に昇華し、個々のみならず、集団としての道德性が醸成していった。そのプロセスの一部始終が目の前で展開していた。学生達との尊い

時間の共有は、何にも代え難く、記憶に残ることだろう。研究室の丸テーブルを囲むことをきっかけに得られた多様な価値観や経験知が、いずれ彼らの生き方の糧になることを願ってやまない。

丸テーブルのある私の研究室は、今日も賑やかだ。



ずっと変わらない問題意識は

道德授業の研究を科学的に探究することが我が国の道德教育がこれまで積み残してきた多くの課題を解決していくことにつながるはずだという信念で、気がつけば四十年以上も道德授業の研究を続けていました。

その間ずっと変わらない私の問題意識は「道德授業は本当に行う意味があるのか」です。これは私が教師一年目にもったものなのですが、新任で何一つ上手くできない私にとっては、しっかりと学級経営ができていては、しっかりと学級経営ができていては、先生の指導は憧れであり目標でした。そして、規律正しく、常にてきぱきと行動し、柔らかな雰囲気やみんな仲がよく、授業中も活発に発言し、先生の指示通りにやるべきことはしっかりとできていく学級の子供たちの姿は私がめざすものでした。そんな学級が作れば子供たちの道德性は育っていくのだからと思っていました。ただし、学級経営がすばらしい先生方が道德の時間の授業

をきちんと行っておられたかどうかは分かりません。そのころは道德の時間の授業をしない先生が大勢おられたからです。しかし、学級経営がよいことと子供の姿がよいことの間にはしっかりと因果関係があるように見えましたし、子供たちの道德性を育む上で、学級経営と道德授業では学級経営の方がずっと優位に思えたのです。

そうなる、学級経営ができていれば道德授業などしなくても子供の道德性は育まれるのではないかと、裏を返せば、道德授業で一体何ができるのかという疑問が湧いてきました。そんな若輩でも道德性は人の内面にあるもので、日々の行動だけでは分からないぐらいのことは理解していました。それでも、道德的な集団の中で望ましいことをきちんと行う日々は、子供の内面に道德性を育てていくだろうと思えました。それなら、わざわざ道德授業をする必要はあるのかという問題意識をもったのです。

どんな研究をしているか

私が道德授業について研究するようになったのも、頭の中に先ほどの問題意識があったからです。それから、次のような道德授業についての課題に取り組みました。

- ・ 道德授業で一体何ができるのか
- ・ 道德授業で子供の何が変わるのか
- ・ 道德の時間にしなければならぬこと
- ・ 少なくともよいこと
- ・ 道德授業における「分かること」の意味
- ・ これらに取り組むうちに道德授業の

評価についての研究が重要であると考えるようになりました。

- ・ 道德授業の効果はどの程度見えるのか
- ・ 道德授業の評価はどうすれば可能か
- ・ 道德授業一時間でできることは何か
- ・ さらに、そこから道德授業で何をめざすべきかという「ねらい」の研究へと発展していきました。一般に行われている道德授業に関する研究は今も昔も指導法に関するものが主流ですが、授業のねらい達成を確かめることも無いままに、指導法の研究ができるのでしょうか。「道德授業の目標は到達目標ではなく方向目標だ」とする考え方も、道德授業で何ができるのかを曖昧にしてきたと考えています。

そんな中で、授業方法や実践に関する様々な課題にも向き合ってきました。次に挙げるのはそのほんの一部です。

- ・ 子供が興味をもって授業にとりくむことと授業の成果との関係
- ・ 子供が課題を見つけたら道德授業は道德性の育成に効果的か
- ・ 道德授業で子供に自己をみつめさせることの意味
- ・ 結末に問題のある教材をどう扱うか
- ・ 道德科の板書は何のためにするのか

以上のように道德授業には、昭和三十三年の特設から六十年以上もの間あまり深くは取り組まれなかった課題に加え、その時々流行や社会の変化による新たな課題もあります。それらの課題に対し創造的に、また批判的に、そして科学的に向き合い、取り組むことに今も努めています。

会員の声 (私と学会)

自己研鑽を重ねる場として

北川 沙織

私は、平成16年に小学校教員に採用されて以降、様々な道徳授業の実践研究に取り組んできた。採用翌年には、名古屋市内の研究会に入会し、諸先輩方の教えのもとに道徳教育の研究に取り組むようになった。さらにその後、道徳教育研究における研鑽を積むため、平成21年から2年間、上越教育大学教職大学院へ内地留学させていただいた。その際、道徳授業の指導方法の一つである役割演技の名人とも呼ばれている早川裕隆先生(現・上越教育大学大学院学校教育研究科教授)の研究室でお世話になったことが、日本道徳教育学会入会のきっかけとなっている。

日本道徳教育学会での初めての発表は、平成24年鳥取県立倉吉文化会館を会場に開催された第八〇回大会である。「役割演技を取り入れた道徳の時間の効果について」教職大学院における『学校支援プロジェクト』の実践を通して」というテーマで、課題を抱えている小学校を支援した研究について発表させていただいた。

その後は、「インクルーシブ教育を旨とした道徳教育の取組」聴覚障害理解を中心として(「第八二回発表」)、「即興的な役割演技の構造に関する実践的研究」監督役割の遂行を中心に(「第八四回発表」)、「道徳の時間の指導方法としての役割演技の理解に関する基礎

的研究」歴史の変遷を中心に(「第八五回発表」)、「即興的な役割演技を通して考えを深める道徳授業」家庭・地域連携を中心に(「第八八回発表」)、「深い学びを実現する役割演技の授業事例」(「第八九回発表」)、「役割演技を通して考える道徳授業」よく視て、よく聴いて、そしてよく考える」授業展開を取り入れることの効果について(「第一〇〇回記念大会発表」等、主に即興的に演じて考える、心理的な技法を用いた役割演技を活用した道徳授業に関する発表の場を、本学会に提供していただいた。

発表の後には、いつも会員の皆様にご示唆をいただくことができ、自身の研究の励みになった。また、一連の発表を通して、歴史的な変遷や「動作化」と「役割演技」との違いをまとめたり、道徳授業に役割演技を取り入れる場合の授業者としての役割なども整理したりすることができたように思う。

私は、人々が言葉を交わし共生・共存する上で、道徳授業の指導方法である「心理的な技法を用いた役割演技」の役割は、大変意義深いものであると考えている。未来を担う子どもたちのものの見方や考え方を成長させることを通して、道徳性をさらに育んでいけるよう、これからも道徳教育の研究に励んでいきたい。

(名古屋市立植田東小学校)

私の実践 生徒が二つの問いづくりをする授業を重ねて

柏市立大津ヶ丘中学校 橋本舞佳

道徳の授業を行う者として長らく、道徳科の目標の文言の指す学習がどういうものなのかを考えてきました。最も難しいと感じてきたのが、「人間としての生き方についての考えを深める」ということです。人間としての生き方とは何か、どうすれば考えを深めることになるのか。その学習過程とはどのようなものなのか。様々な場所での学びを得ながら、考え続けました。

この探究の末に辿り着いたのが、生徒による二つの問いづくりでした。一つ目は、生徒の問題意識を醸成し自分の捉えを促す教材の登場人物への問いです。この、生徒がつくった問いをつないで、時に補って私は授業を行います。そうして登場人物の生き方を支える価値観を追求しきつた後、生徒たちは、今度は自分を見つめて自分の生き方を問います。これが二つ目の問いです。

生徒の問いで授業をすることも、生徒に自分を問う問いをもたせることも、まことに容易ではありませんでした。挑戦と反省を幾度も繰り返し、それでもこの二つの問いが中学生にとって大事なはずだと思いつけたのは、「人に問われて生き方を考えていくのか、自分のか」という思いがあったからです。中学校を卒業して、この先を生きてい

く時、誰がこの子たちの生き方を、問うてくれるのだろうか。自分を問うていくのは自分です。「生き方」とは、生徒自身の人間としての生き方に他ならず、その問いは最終的には自分に向かう必要があると思えました。

自分を客観的に見つめて問う思考は、生徒にとって難しいものです。まずは教材の人物の生き方を問えるようになって、その質を向上することが自分の生き方を問う問いを生成する力を高めるだろうと考え、約二年この授業を続けました。

始めた頃は、生徒に問いを作らせておきながら、私が用意した発問を補うことが多かった授業も、今は生徒の問いで進めることができます。生徒の問いづくりの力は目覚ましいものです。どういった問いが生き方を考えていく上で必要か(関係性の中で問うこと、共感的、分析的に問うこと)を、生徒自身が理解していると感じます。

十二月、「二人の弟子」を行いました。生徒たちは道徳、智行、上人それぞれに問いをつくらせていました。挙手で出し合った後、練り上げて本時のテーマを決めます。それは「白ゆりを見た智行とフキノトウを見た道徳の共通点は何か」でした。授業のねらいと通ずるところがあったので、生徒の問いを

つないで授業ができそうだと進めていくと、道信の生き方に迫ったところでチャイムが鳴りました。(しまった...)と果然とする私に、「悔しい〜」「続きはいつやるんですか?」と言う生徒たち。こんなことは初めてだけれど、来週続きから始めようと決意し迎えた次の時間、智行の生き方に迫り、二人の共通点を、生徒と共に考え抜くことができました。写真はその板書です。



二人は自分の未熟さを受け入れた。だから見つめ直せた。どんな人も人としてであろうとする。正しい道に戻りたいと願う。その心は全ての人にあり、それが人間の本质だ。これが、授業で明らかになったことです。「自分は自分を見つめ直して、よりよい自分になろうと考えられているか。」ある生徒の、自分の生き方を問う問いです。生徒たちは次の授業の始めに、それぞれの問いにこたえます。その姿は、自分の生き方を創っていく姿そのものです。

卒業まで限られた授業数になりました。最後まで大切に授業をしたいと思えます。

『修身教授革新論』

小原 國芳

玉川学園の創立者である小原國芳(一八八七〜一九七七年)が、一九二〇(大正九)年に著した一書です(著者名は鯉坂國芳)。この時期、小原は、沢柳政太郎の成城小学校主事として教育実践に力を注ぎ(一九一九年〜)、また、八日間いわたつて開催され、連日二〇〇〇人の聴衆を集めた「八大教育主張講演会(一九二一年)」では「全人教育論」を講演するなど、大正新教育運動の旗手の一人として活躍していました。

その最中に書かれた『修身教授革新論』は、児童中心主義の思想を土台とした修身教授の改革を主張するものです。同時に、このあと玉川学園を創立することになる小原が、理想の教育を目指して、教育界に挑戦する姿も認めることができます。

本書に込められた彼の主張は「修身教授の哲学化」に象徴されています。わかりやすく言えば「考える道徳」です。その目的は、「吾々は自己の内に、勅語を、法律を、憲法を、校規を、道徳を、戒律を、教理を、見出さねばならぬ。決して外から強ひてはならぬし、強らるるもならぬ。」というように、世の中の価値を鵜呑みにせず、自己の「良心の命令」に従って生きる人間をつくることでした。クリスチャンで

8 道德教育を支えてきた名著

あった小原には、日本人には「善とは」「道徳とは」「人生とは」など、「生きる目的」を考える機会が乏しいことを認識していました。

「修身教授の哲学化」には、子ども「物を噛み分けて行く態度能力」考える力への深い信頼があります。「子供だからとて決して吾々はバカにしてはならぬ。」「中略」先入見のない彼等の思想生活は純だから却つて大人よりも深く分ることがある」。だから、授業では「深く児童を考へさすこと、一々批判を与へてやること、書くこと、書くことに依つて児童自身か或る問題に対して思想の体系をこしらへること」が期待できるのです。また、子どもに対する過干渉は「自分の事は自分で処決し得る子供」にならないばかりか、「權威に阿り、顔色を伺ひ、名に捕れ、利に鋭き人間」となりかねないことも指摘しています。

子ども自身に「道徳を発見させ、善悪を審利させ」る修身教授を目指す小原にとつて、当時主流であった徳目主義は当然克服すべきものに映ります。「忠を尽せ孝を尽せといふ。そんなことは分り切つて居る。」「中略」どうすることが忠か、どうすることが孝か。なぜ忠を尽し、なぜ孝を尽すのか、それが大問題なのである。だから私は今日の修身教授の最大急務は各徳目に確たる内容を与へること」であると述べています。そして、徳目の確たる内

容を与える糸口として「出来事」を重視します。「滅多にない出来事だと人は日はん。されど滅多にないことが大事なのである。日常一般のことなら何人にも理解が出来、何人にも履行が出来る。」「中略」真人の実際の価値を定むるのはこの滅多にない出来事なのである」。だから、「修身の時間に皆で、脳漿を搾つて研究する必要」が出てくる。「出来事」を認識し、人の行動を批判する力、皆で研究する力の育成。これこそが「自ら道徳を発見し創作すること」につながるといふのです。これは同時期の岩瀬六郎の「生活修身」にも共通する課題意識です。さらに小原は、徳目主義のみならず、人物主義が期待する「感情的」「感傷的」な修身教授にも批判を加えています。

以上のように、本書は、今日の「考え、議論する道徳」の源流となる画期的な著作といえます。

なお、小原の視線の矛先は、「考える道徳」の実践を支える教師にも向けられています。「あまりに今日の先生方は伶俐すぎる。右から左へ、それと役に立つものでないとやらぬ。」「中略」奥行のある、深味のある、ユトリのある、教育をして欲しい。今日の如くんばキット五十年もしたら日本人は Yankee の粕みたような浅薄な国民になることだらう」と。「Active Learning」「ICT」「SDGs」に見事に即応していく現代の教育界を、小原は草葉の陰からどう見ているでしょうか。

高等学校における道德教育(最終回)

「総合的な探究の時間」における道德教育 飯塚 秀彦

今号では、高等学校における道德教育の中核的な指導の場面とは位置づけられていないものの、高等学校における道德教育と関連が強いと考えられる「総合的な探究の時間」について確認します。

高等学校では、現行の学習指導要領から「総合的な学習の時間」が「総合的な探究の時間」に名称変更されました。「高等学校学習指導要領解説総合的な探究の時間編」(以下、「解説総合編」)によれば、小・中学校の「総合的な学習の時間」と高等学校の「総合的な探究の時間」には異なる特質があり、このことが端的に表れているのが、それぞれの第1の目標にあるとされています。「解説総合編」では、図のようなイメージが示されています。ここで注目したいのは、探究する課題と一体不可分であるとされる「自己の

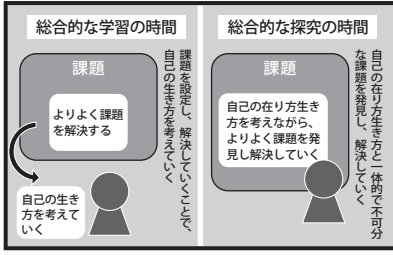


図 課題と生徒との関係(イメージ)

在り方生き方」です。本連載第2回で確認したように、高等学校における道德教育は、「人間としての在り方生き方に関する教育」とされています。「総合的な探究の時間」で

は「人間としての在り方生き方」ではなく、「自己の在り方生き方」と表現されていますが、その意味するところは道德教育との関連が強いと考えられます。

「解説総合編」では、「総合的な探究の時間」の特質を表す名称変更の背景の一つを、次のように述べています。…、一つは、この時期の生徒が、人間としての在り方を理念的に希求し、それを将来の進路実現や社会の一員としての生き方の中に具現しようと求めていることである。(傍線、筆者)

さらに、高校生の発達の段階と「総合的な探究の時間」との関わりについて「解説総合編」には、次のような記述もあります。

高等学校の段階の生徒は、自分の人生をどう生きればよいか、生きることの意味は何かということについて思い悩む時期である。また、自分自身や自己と他者との関係、さらには、広く国家や社会について強い関心をもち、人間や社会の在るべき姿について考えを深める時期でもある。それらを模索する中で、生きる主体としての自己を確立し、自らの人生観、世界観ないし価値観など、自分なりの種々のものの見方や考え方を形成し、主体性をもって生きたいという意欲を高めていく。

自然や社会との深いつながりや豊富な体験を契機に様々な問題と出会い、その解決に取り込む学習が、自己の在り方生き方により深く内省的に捉えていくことにもつながるものと考えられる。(傍線、筆者)

これらの記述を踏まえると、「総合的な探究の時間」は、高等学校において

る道德教育の中核的な指導の場面とは位置づけられていないものの、高等学校における道德教育、すなわち「人間としての在り方生き方に関する教育」において重要な指導場面であると考えられます。しかし、現状の「総合的な探究の時間」では、探究する活動の充実に力点はおかれていないものの、残念ながら「自己の在り方生き方をより深く内省的に捉えていくこと」につなげられている実践は多くはありません。

中学校の「特別の教科道德」の「指導計画の作成と内容の取扱い」において、「現代的課題の取扱いにも留意し、身近な社会的課題を自分との関係において考え、その解決に向けて取り組もうとする意欲や態度を育てるよう努めること」と示されています。また、高等学校の道德教育の目標には「生徒が自己探求と自己実現に努め国家・社会の一員としての自覚に基づき行為しようとする発達の段階にあることを考慮し」と示されています。

地球上のすべての人と動植物の暮らしと命を脅かしている気候変動、地域間や国家間の紛争や戦争、人工知能など科学技術と人間との関わり、価値観などの対立を背景とする分断等、不透明さを増す現代社会にあって、「人間や社会の在るべき姿について考えを深める時期」にある高校生にとって「人間としての在り方生き方に関する教育」との関連を踏まえた「総合的な探究の時間」のより一層の充実が求められるものと考えます。(長野大学)

討報

本学会の副会長・会長代行さらに顧問としてご尽力頂きました高島元洋先生(お茶の水女子大学名誉教授)が、昨年12月7日に享年75歳でご逝去されました。

本学会における先生の多大なご功績に感謝するとともに、先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。(学会事務局)



編集後記

新しい年となりました。

昨年起こった能登半島地震や各地の大雨の災害などで、ご本人やご親戚等関係の方が大変な状況におられる会員は少なくないのではないのでしょうか。そのような中、白木先生の研究室に集う学生さんたちのまっすぐな行動力には、本当に頭が下がります。本年がよい年になりますように。

本号で、「高等学校における道德教育」の4回シリーズが完結します。飯塚先生のおかげで、高等学校の道德教育の大事なポイントがとてもよく理解できました。ありがとうございました。シリーズで執筆いただくのは、とてもいいですね。(広報委員)